

「をかしの御髪や」型の感動喚体句について

近 藤 要 司

一 はじめに

山田孝雄（一九〇八）における句（ほぼ通念上の「文」に相当する）には、述体句と喚体句の二大別があった。述体句は、平叙文疑問文など主語述語の対立統一をめぐる通常の文である。対する喚体句とは、感動や希求のために用いられた構文で、文全体が「体言＋助詞」という形を取るものである。この喚体句には、「老いず死なずの薬もが」のような希求を表す希望喚体と「美しき花かも」のような感動喚体句の二種がある。

山田によれば、典型的な感動喚体句は、右の「美しき花かも」のように骨子体言を修飾する連体修飾部が必須である。中古の典型的な感動喚体句には、以下のような三つの形式があった。

- ・ いとわりなきわざかな（桐壺）
- ・ さかさまに行かぬ年月よ（若菜下）
- ・ をかしの御髪や（若紫）

この中で、終助詞カナによる喚体句については近藤（一九九七）で、連体修飾部が情意や評価の形容詞で、骨子体言が右に示したような「わざ、こと、けしき、ほど」など形式名詞であるものが多いこと、また、このカナが述

語用言に下接した場合も情意評価の形容詞を連用修飾部に持つ用例が多く、その点で、カナの感動喚体句に連続していることを指摘した。終助詞ヨの喚体句に関しては、近藤（一九九六）で、情意評価の形容詞が連体修飾している例は稀であり、カモやカナによる感動喚体句の表現とは異質であることを指摘した。

今回は、もう一つの感動喚体句である「をかしの御髪や」のような感動喚体句（以下「ノーヤ」型喚体句）とする。）について考察する。

「ノーヤ」型喚体句は、カナ喚体句、ヨ喚体句と並んで感動喚体句の典型とされているが、上代に用例がなく、中古の用例も散文が中心で、和歌にはほとんど用いられなかった。このように、比較的新しい用法であるとともに、連体修飾部が「形容詞形容動詞語幹＋の」という特殊な形式であることなど、注目すべき語法である。

末尾のやは、形容詞形容動詞の語幹・終止形につく終助詞やであり、疑問係助詞やとは異質である。カモやカナの喚体とは構造が異なり、この点ではヨによる喚体句に近い。

以下、二で、『源氏物語』の「ノーヤ」型喚体句を観察し、三で形容詞形容動詞の語幹用法を概観し、四でカナ喚体句との異質性について考察し、五でこの喚体句の特殊性について考察する。

用例は、『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』を利用して採集し、小学館『新編日本古典文学全集 源氏物語 1～6』『日本古典文学全集 源氏物語 1～6』を参照した。『源氏物語』の用例についてはかっこ内に巻名を示した。

二 『源氏物語』の「ノーヤ」型喚体句

『源氏物語』には、この「ノーヤ」型の感動喚体句は、九四例見られた。ここでは、それらの概要を示す。

二・一 連体修飾部

連体修飾部は一例の例外を除くと、すべて形容詞形容動詞の語幹である。多いものをあげると以下のような。

あやし (一〇例)

- ・「あやしの人の親や。まづ人の心はげまさむことを先におぼすよ。けしからず」とのたまふ。(玉鬘)

をかし (七例)

- ・「をかしの人の御にはひや。折りつれば、とかや言ふやうに、鶯もたづね来ぬべかめり」(宿木)

あはれ (五例)

- ・「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親」(帚木)

うたて (五例)

- ・「いかに、うたての翁や、とむつかしくうるさき御心そふらむ」(若紫)

めでた (四例)

- ・「いで、あなめでたのわが親や。かかりける種ながら、あやしき小家に生ひいだけること」とのたまふ。(常夏)

(常夏)

あぢきな (三例)

- ・「いで、あなあぢきなものあつかひや。さればよ」と思ふ。(若菜上)

言ふかひな (三例)

- ・「言ふかひなのことや。あさまし」とて、またもたまへり。(帚木)

口惜しの (三例)

- ・「口惜しの花の契りや、一房折りて参れ」(夕顔)

他に、「あいな、あさまし、いみじ、うしろめた、ねた、はかな、わりな、見苦し、面な」が二例ずつ、「あは、ありがた、いとほし、うつくし、うとましげ、かしこ、かるがるし、ことなることな、ことわり、こよな、さうざうし、さがな、さだめな、つれな、なだらか、なほなほし、めやす、ものぐるほし、ものはかな、もの馴れ、やすげな、よからず、わろ、をこがまし、似げな、若、若々し、心苦し、心幼、幼」が一例ずつあった。
例外は左の一例である。

・「短夜のほどや。かばかりの対面もまたはえしもやと思ふこそ／＼なにとなく心のどまる世なくこそありけれ」(須磨)

これ以外は、連体修飾部分はすべて形容詞・形容動詞の語幹であり、動詞が連体修飾をしている例はない。ただ、左のように、他の連体修飾が介入しているものは少数存在する。

・わりなの、人に恨みられたまふ御齡や(末摘花)

後述するようにカナ感動喚体句とは単純に比較できない点もあるのだが、「ノーヤ」型喚体句に対応する形式のカナ感動喚体句の連体修飾部にも、「あやし、あはれ、みぐるし、をかし」などが用いられており、連体修飾部の語彙に関しては、カナ喚体句と大差ない。

二・二 骨子体言

骨子体言についても主なもの挙げる。

わざ(十五例)

・中將は心のうちに、ねたのわざと思ふところあれど(藤裏葉)

こと(「事」と取れるものも「言」ととれるものも含む)(九例)

・「まれまれは、あさましの御ことや。間はぬなど言ふきは、ことにこそはべなれ。心憂くものたまひなすかな。(若紫)

世(六例)

・中将、木工など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに(真木柱)

さま(六例)

・見たまへよ、懸想びたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。(夕霧)

心(四例)

・あやしの心や、とわれながらおぼさる。(葵)

人(三例)

・人にも似ぬ用意など、あなめでたの人や、とのみ見えたまへるを(早蕨)

以下、二例あったものが「ありさま、ことども、口つき、身のほど、返り、契り」、一例あったものが、「いらへ、けしき、けはひ、ことわり、さかしら、さまども、とぶらひ、にほひ、ほど、まじらひ、ものあつかひ、ものおち、しるべ、ものの香、もの言ひ、わが親、わたり、翁、好み、思ひなり、手、消えどころ、心のほど、心ばへ、身、人ならはし、人に恨みられたまふ齡、人のにほひ、人の親、哀へ、世の中、聖心、ご達、髪、仏菩薩、亡きがよそへ、木霊の鬼、頼もし人」である。

典型から大きく外れる例としては、骨子体言がそのまま終助詞に下接せず、後半の動詞述語文の主語となっているものが一例あった。

・「見苦しの君達の、世の中を心のままにおごりて、官位をばなにとも思はず過ぐしいますがらふや。(竹河)骨子体言の多くが「わざ、こと、さま」などの形式名詞や「世、心」などの非物質的な名詞が多いことは、カナ

感動喚体句と同じ傾向である。

以上のように、連体修飾する形容語の語彙や、骨子体言の種類などを見れば、カナ喚体句にも通ずる特徴をっており、こういう観点から見れば、「ノーヤ」喚体句とカナ喚体句にそれほど大きな違いはないということになる。

二・三 終助詞ヤの他の表現との関連性

カモ・カナ・ヨは、感動喚体句とともに、述語用言に下接する終助詞としても用いられているが、ヤについても同様のことが言える。ただし、終助詞ヤはそれらよりも広範囲に用いられている。これについては、近藤要司（一九九五）に詳しく述べた。ここでは、「ノーヤ」型喚体句と比較すべき三類型のみ挙げる。

（一）形容詞、形容動詞の語幹に下接する助詞ヤ

・「あなかたはらいたや、いかが聞こえむ、とおぼしわづらふ。（若紫）

（二）形容詞、形容動詞、断定ナリの終止形に下接する助詞ヤ

・「そもまことにそのかたを取りいでむ選びに、かならず漏るまじきは、いとかたしや。（帚木）

・「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。（夕顔）

（三）他の活用語の終止形に下接した助詞ヤ

疑問係助詞ヤの文末用法の例と、終助詞ヤの例が混在することになる。特にラ変型活用語と打ち消しズの場合には、形式からは区別しがたい。

・惟光に、「この西なる家はなに人の住むぞ、問ひ聞けたりや」とのたまへば（夕顔）

・「さしぐみに袖濡らしける山水にすめる心は騒ぎやはする 耳馴れはべりにけりや」と聞こえたまふ。（若紫）

前者「夕顔」の例は、係助詞ヤの文末用法で質問の例であるが、後者「若紫」の例は、終助詞が下接した詠嘆の

例である。

(一)(二)(三)は連続的である。上代には(一)がわずかに存在したようだ。シク活用形容詞では、語幹と終止形が同形であることから、ク活用においても終止形に接続する形も許容され、それがさらに形容動詞断定ナリなどにも及んだのであろう。これが(二)の類型である。だが、動詞型活用語の終止形には疑問係助詞やも下接するので、ラ変を含む動詞型活用語の場合には、終助詞ヤと疑問係助詞ヤの終止用法とが混在することになる。これが(三)である。

本稿の課題である「ノーヤ」型喚体句との連続性がうかがえるのは、語幹を含む(一)である。

この語幹用法は、述語に対して主語が明示されるという述体的な構成はとらない。語幹と終止形の違いが明確なク活用で見ると、「語幹＋ヤ」は、すべて一語文的なものばかりである。

・あなかしこや。(若紫)

・いで、あなさがなや。(橋姫)(注一)

「語幹＋ヤ」には、このように、主語相当の語句が無いものばかりであり、「ノーヤ」喚体句の連体修飾部と骨子体言を主語述語に転じた「この御髪、をかしや」のような形式のものは見られないのである。これは後半で扱うカナ喚体句との大きな違いの一つである。

三 形容詞・形容動詞語幹の用法について

ここで古代語の形容詞形容動詞の語幹の用法について、概観しておく。

三・一 上代の語幹用法

上代の形容詞(注二)の語幹用法については、橋本(二九五九)が十四類に分類している。この中で「ノーヤ」

型喚体句と関係が深いものは、語幹が感動用法に用いられた場合と助詞ノを介して連体修飾する場合である。この二つについて見てみよう。

語幹が感動表現に用いられた用例は万葉集に数例見られる。

- ・常世辺に住むべきものを剣大刀汝が心からおそや（於曾也）この君（九卷一七四一）
- ・あな醜（痛醜）^{みにく}賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む（三卷三四四）

- ・草香江の入江にあさる葦鶴のあなたづたづし（痛多豆多頭思）友なしにして（四卷五七五）

一七四一は、この形容詞語幹に終助詞ヤが下接した例だが、萬葉集ではこの一例のみである。このように上代においても形容詞語幹の感動用法は、ある程度用いられていたようだ。

助詞ノを介して連体修飾する場合について見てみる。先の十四類の分類の中には、「の」「つ」等を伴って連体修飾語を構成するもの」も挙げられているのだが、用例はそれほど多くない。「大君の遠の朝廷（等保能美可度登）」と思へれど」（十五卷三六三八）のような、「遠の」の例が九例ある以外には「軽の」（五例）、「赤の」「安の」などがある程度である。いずれもク活用で、シク活用の例は上代には皆無で、中古にならないと登場しない。（注三）

ただし、後代の形容動詞の語幹ともいえるべき「あはれ」には、「ノーヤ」型喚体句に近い形がある。

- ・ゝあはれの鳥と（安波礼能登里等）言はぬ時なし（十八卷四〇八九）

このように、上代では語幹単独の感動表現は、しばしば用いられた。一方、「情意評価の形容詞の語幹＋ノ」が連体修飾した例は、皆無である。

中古の『源氏物語』においても、語幹のみを用いた感動用法はもちろん存在している。

- ・ 「あなかしこ」(若紫)
- ・ 「いとことわり」(藤裏葉)
- ・ 「いとうたて」(夕霧)

二で見た「語幹＋終助詞ヤ」と同様に一語文であり、主語を持つ例はない。

『源氏物語』においても「語幹＋ノ」は、連体修飾としても用いられる。ただし、目立つものは、左のような形容動詞の語幹のものである。形容動詞の語幹と名詞との境界は曖昧であり、これらは名詞として用いられている可能性もある。

- ・ ただあからさまのほどを許しきこえたまふ。(真木柱)
- ・ 今二三子をいたづらの年に思ひなして(少女)

形容詞の語幹がこのような連体修飾に用いられるのはあまり多くない。特に「ノーヤ」型喚体句に用いられる形容詞形容動詞の語幹四八種に関して、通常の述体内部の連体修飾に用いられるのは、「あやし」以外にはない。

- ・ 山寺には、いみじき光行ひいだしたてまつれり、と仏の御面目あり、とあやしの法師ばらまでよろこびあへり。(賢木)

- ・ ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるもいと恐ろし。あやしのさまに額ひたひおしあげていで来たり。(手習)

このように、上代中古を通じて、形容詞形容動詞の語幹は感動表現には多用されていた。また、連体修飾にも用いられていたが、「ノーヤ」型喚体句の連体修飾部に用いられる語幹については「あやし」を除いては、通常の述体内部の連体修飾に用いられてはいないのである。

四 カナ喚体句との比較

二節では、連体修飾部の種類や骨子体言の種類など概観したが、そこで見えるかぎり「ノーヤ」型喚体句とカナ喚体句は共通性が多いように思える。しかしながら、実は「ノーヤ」型喚体句は、カナ喚体句との相違点の方が目立つ。

四・一 述体との関連

二節末に述べたことだが、「語幹＋終助詞ヤ」においては、「ノーヤ」喚体句の連体修飾部と骨子体言を主語述語として持つ形式（「骨子体言＋語幹＋終助詞ヤ」）は存在しない。

一方、カナ喚体句と対応する「連体形＋カナ」の形式においては、右のように主語を文の中に含むものが数多く存在する。

- ・ 女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかな（帚木）
- ・ さも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。（朝顔）
- ・ 御前の梢も霞隔てて見えはべるに、あはれなること多くもはべるかな（早蕨）

このことは、「ノーヤ」喚体句とカナ喚体句の連体修飾部の性質の違いを示している。

形容詞形容動詞の語幹の感動用法については、山田（一九〇八）は、「体言に変じたる語幹を以て、述語的地位にたたしむることあり。かかる時の文は皆感動をあらわすものなり。すべて感動をあらはすものに体言を以て述語的地位に立たしむることは、往々あるなり。」としており、この用法を体言としての用法だと理解していたことが分かる。体言として用いられるということは、主語概念と賓語概念を統一する述格として機能を失っていると見る

べきであろう。事実「語幹＋終助詞や」は、主語を持つことは許されていなかった。

その点から見ると、カナ喚体句の連体修飾部は、用言連体形であるから当然述格性を失ってはいない。カナ喚体句の連体修飾部と骨子体言は、「述語」と「主語」であることを失っていないのである。

語幹を連体修飾にもつ「ノーヤ」喚体句は、連体修飾部は情意評価といった属性的意味を保持してはいるものの、述語性を失った形式をとっている以上、「述語」と「主語」という体制からは遠いものとなっている。

この述体への連続性をあらわにしたカナ喚体句とその連続性を失っている「ノーヤ」喚体の違いは大きいと考えられる。

四・一 喚体句としての純粹さ

感動喚体句の典型は、「連体修飾部＋骨子体言＋助詞」というものであるから、用言性の語と体言と助詞の三つがあれば完成する。事実、「ノーヤ」喚体句のほとんどは、そのような単純な形式である。

- ・ をかしきを見たまうて、「あいなのことや」と笑ひたまふものから（行幸）
- ・ さまざまめづらしきさまに書きまぜたまへり。「かしこの御手や」と、空を仰ぎてながめたまふ。（葵）
- ・ 似げなの亡きがよそへや、とおぼす。（夕霧）

末尾の例のように骨子体言が「体言ノ・ガ体言」という形をとるものもあるが、これも典型に含めてよい。「ノーヤ」喚体句の九四例中、八四例がこのような単純なものである。他には右例のように連体修飾部に形容詞が二つ用いられた例が三例ある。

- ・ かくかたくなしうかるがるしの世や、とものしうおぼえたまへど（夕霧）
- さらに右例のように従属節が前置されるもの四例ある。

・尼君、髪をかきなでつつ、「梳ることをうるさがりたまへど、をかしの御髪や。（若紫）
 このような単純な例が九割以上を占め、主述を備えているものは、右の二例のみである。

・かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏菩薩やとつらうおぼゆるを（蓬生）

・常なき世にかくまで心おかるるもあぢきなわざやとかつはうちながめたまふ。（朝顔）
 さらに、形式が崩れていると考えられる例が二・二にあげた一例のみある。

・見苦しの君達のゝ過ぐしますがらふや。（竹河）

このように、「ノーヤ」喚体句は典型的で単純な感動喚体句の形式を守った用例が大半を占めるのであるが、カナ喚体句では様相が異なっている。カナ喚体句の用例は、三〇〇例（和歌を除く）近くある。その中には以下のような主述が整ったものが数多く見られる。

・「ゝねびゆかむさま、ゆかしき人かな」と、目とまり給ふ。（若紫）

・ひと夜よの月影は、はしたなかりしわざかな。（竹河）

・されどかたいものかな、人の心は、と思ふにつけて（蜻蛉）

逆に典型的な喚体句形式のものは、下記のような、副詞を伴う例を合わせても四割程度である。

・いと、かたはら痛きわざかな。（末摘花）

また連体修飾部が助動詞を含むことも多い。

・殿上人どもも、「こよなくさうさうしかるべきわざかな」と惜しみきこゆ。（宿木）

これらのことは、中古では、「ノーヤ」喚体句は典型的な感動喚体句の形を取るものであったのに対して、「体言＋カナ」は典型的な感動喚体句も述体的なものも含む交雑状態であったことを示している。

四・三 使用される位相

カナ喚体句は、もちろん和歌にも多用される。『源氏物語』でも、三〇例以上が和歌に用いられている。

・空蟬の羽におく露の木がくれて忍び忍びにぬるる袖かな（空蟬）

一方、『源氏物語』においては、「ノーヤ」喚体句は和歌には一例も用いられていない。古今和歌集にも見られない。（注四）このことは、「ノーヤ」型喚体句が整った文言には用いにくい表現であり、カナ喚体句とは異なって、かなり現場依存の強い表現であったことを示唆している。（注五）

以上、「ノーヤ」喚体句とカナ喚体句を比較してその特徴を示せば

（1）述体と連続した面がない

（2）典型的な感動喚体句の形式をとる

（3）和歌などには用いられない、発話の現場に依存した表現である

ということになる。同じ感動喚体句ではあるが、両者には大きな違いがある。また、冒頭に述べたように終助詞ヨは感動喚体句（注六）にも用いられるが、どちらかといえば、単純な呼格として用いられることが多い。

述体と連続した面を持つカナ喚体句、一語による呼格との連続性を持つヨ喚体句、その二つとも異なる特徴を持つもの、典型的な感動喚体句の形式をもちながら、述体とは隔絶しているものが「ノーヤ」型喚体句なのである。

五 「ノーヤ」喚体句の特殊性

五・一 感動喚体句を捉える二つの立場

山田（一九〇八）は、感動喚体句の連体修飾部を完備句であるための必須の条件とする。喚体述体という文形式

の二大別を重視する研究者の中でも、この連体修飾部についての立場は二つに分かれる。一つは、この規定は完備句であることについての規定であり、感動喚体句そのものの規定とは齟齬を来しているという立場である。

尾上（一九八六）は、連体修飾部についての山田の規定は「発話された現場的な状況を離れてもその文言の意味が了解されるようにという、脱状況的自立性、言語としての自足性を「感動喚体句」に求めた結果である」とした上で、「山田博士が述体と喚体を分けたことの意義は、対象描写、対象説明の文と心的経験そのことを表現する文との異質性を主張した点にある。この精神を継承するためには、山田博士の「感動喚体」が内包する二面のうち、対象描写の世界にかかわる一面を切り捨て、喚体―心的経験そのことの表現、述体―対象事態の描写という対応関係を鮮明にすることが有効であると思われる。」という立場をとり、理念としての喚体は「言葉になるのは、遭遇対象、希求対象のみで、心的経験・心的行為の面はことばにならない」ものであるという規定を下す。この立場からは、山田が不完備句とした一語文「花！」のようなもののみが喚体句の理念を満たすものであり、「美しき花かも」の類は、心的経験・心的行為の面が言葉になっているという点で、理念としての喚体句から排除されることになる。

石神照雄（二〇一〇）では、感動喚体句の中心骨子は、呼格体言であるとした上で「喚体の呼格とは、指示判断を根拠とする位格関係であり、現実的には独立語という文形式として実現する。呼格は喚体に於ける構文関係の唯一絶待の位格であり、相関的な関係構成を行わない」とする。連体修飾部は骨子体言との間に、意味的には主述の関係を構成するものであるが、これを必須の成分とすることは、「用言が述語（賓述格）として担う陳述、即ち述体文であることの根拠の判断（分析判断）を以て、連体格の用言に、感動喚体の根拠を見いだそうとするもの」であり、「山田文法は、この点では感動喚体の根拠を判断、即ち分析判断に置いていっていることになる」と主張する。感動喚体句は理念上呼格を「唯一絶待の位格」とせねばならないのである。

感動喚体句の理念を尾上（一九八六）、石神（二〇一〇）のように規定すれば、「美しき花かも」の類は、その理念からは排除される。しかしながら、古代語の事実としては、このような感動喚体句がある類をなして存在することとは事実であるし、また一方で、連体修飾部のない「花かも」「花かな」という感動喚体句は存在しないのである。「連体修飾句＋骨子体言＋助詞」という山田式の感動喚体句は、確かに類として他の一語文的な感動表現とは一線を画して存在するのである。

尾上（一九八六）石神（二〇一〇）とは対照的に、連体修飾部こそが喚体を喚体たらしめているという立場をとる論者もある。川端（一九六三）では、感動喚体句における連体修飾部、例えば「美しき」が一般の連体修飾のうちに、「花」√「美しき花」というように「花」一般よりも相対的に限定された「語」を形成しているのではなく、個別具体的な事態「花美し」に対応しているとする。これは、石神照雄（二〇一〇）が指摘するように、述体との連続性の上で感動喚体句を捉えている。川端（一九六三）は、主述の倒逆が、「述体の判断における二項関係の未分析、あるいはその主述的な表現の拒否」を意味するとしているが、まさにそのように把握すること自体、述体との連続を前提としていることになる。

しかし、主述二項が存在することをもって、感動喚体句を述体との連続として捉えることと、古代語の感動喚体句が一語文とは非連続の独自の表現形式として存在したことは別の問題である。

五・一 「ノーヤ」型喚体句の特殊性

ここにいたって、カモやカナの喚体句と「ノーヤ」型喚体句との異質性が際立ってくる。カモやカナの喚体句、たとえば「美しき花かも」の連体修飾部は、用言述語の連体形であり、主語述語の統一をはかるという用言本来の働き（述格性）をあらわにしている。また、「美しき花」のような「用言連体形＋名詞」というのは、通常の文表

現としてありふれた形でもあるのだ。一方、「をかしの御髪や」の場合には、連体修飾部は「をかしの」という形態であり、形容詞の語幹を名詞相当として用いたものであり、用言の述格性は失われている。また、すでに述べたように、「情意や評価の形容詞形容動詞の語幹＋の」という形は、他の通常の述体句の中には現れない形なのである。

カモ・カナによる感動喚体句の形式は、「連体形＋骨子体言」という倒逆した関係によって、述体における通常の二項的な判断を拒否している。逆にいえば倒逆という位置関係によってのみ、二項的な判断を拒否していることになる。ところが、「ノーヤ」型喚体句においては、通常の主述とは倒逆した位置関係のみならず、連体修飾の形式においても、二項的な判断を拒否しているのである。このような「ノーヤ」喚体句の特殊性をどう捉えるべきか。このことを考察する際に参考になるのが、以下の二つの形式である。

五・二・一 引用的な「の」

一つは以下のようなものである。

・丹波道の大江の山のさな葛絶えむの心（絶牟乃心）我が思はなくに（萬葉集十二卷三〇七一）

この歌の「絶えむの心」について、澤瀉註釈では、「丹波の国に行く道にある大江山の玉葛のように、二人の仲を絶やそうという心を私はもってはいませんのよ。」「万葉集全注では、「丹波へ行く街道の大枝（おおえ）の山の玉かずらは、そのつるがどこまでも絶えることがないように、二人の仲が絶えるだろうなど思う心を私は持ったことは決してありません。」と口語訳しているように、現代人の感覚からすると、臨時的な引用を示しているように思えるのである。

このような臨時的な引用を示すノは、中古にも盛んに用いられている。『源氏物語』では以下のような例が見ら

れる。

「ゝむの心、心地、けしき」の形式（三七例）

・女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御けしきあるを、おぼしわづらふことありける、この君にたてまつらむの御心なりけり。（桐壺）

「ゝじの心」（九例）

・常陸の宮にはしばしば聞こえたまへど、なほおぼつかなくのみあれば、世づかず心やましう、負けてはやまじの御心さへ添ひて、命婦を責めたまふ。

「希求バヤの心」（二例）

・わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。（柏木）

浅見（一九五九）は、これらについて、

「絶えむの心」は「絶えむ心」とは同価値ではない。中古の多くの例に支えられて、「絶えむ」は「わが心」の直接的な表現であり、作者の決意を表明するものだ。と言わなければならない。そこからまた、この際の助動詞「む」は終止形である、という結論が導かれる。

としている。

おそらくは、「ノーヤ」型喚体句の連体修飾部も浅見（一九六五）のいう「終止形」相当の位置づけが妥当なのであろう。つまりは、「をかしの御髪や」は、「をかし！この御髪や！」という感動文の二文併置に転一步のところにある表現なのではないか。

五・二・二 「形容詞や。呼格ヨ。」の形式

二つ目は、終助詞ヨによる感動文の二文併置の形式である。

・ いとおすけても恨みはべるななりな。いとかなしや。この人のほどよ（少女）

・ 古代なる御文書きなれど、いたしや、この御手よ。（行幸）

・ あいなしや、わが心よ、なにしにゆづりきこえけむ（宿木）

これらは、遭遇した事態への感動を、内面に生じた情意を表出する感動文と、遭遇事態の中核のモノへの呼格一語文という二つの形式で表現している。さきほど挙げた「をかし！この御髪や」に相当する形式である。

五・三 遭遇事態・中核のモノ・情意

前節に挙げた二つの形式をもとに考えれば、「ノーヤ」型喚体句表現の成立の事情は見えてくる。「いたしや、この御手よ」のような二つの形式で表現された二文併置の感動表現が、引用的な「の」によって結合されて登場した表現なのである。そこには、カナ喚体句の喚体句としての純粹性の喪失も背後の事情として浮かんてくる。四・二で述べたようにカナ喚体句は、むしろ述体の名詞述語文に近いものが入り交じる交雑状態になっており、より純粹に感動喚体句を表現する形式が要請されたということも考えられる。

しかしながら、そのような事情は事情として、では何故このような表現形式があえて要請されるのであろうか。

五・四 臨時的な名付け

石神（二〇一〇）は「喚体の呼格とは、指示判断を根拠とする位格関係であり、現実的には独立語という文形式として実現する。」という立場を取り、山田式の感動喚体句の連体修飾部を「喚体の論理、即ち指示判断を根拠とした呼格の絶待性の論理からすれば、連体格としてあるものは、体言に内属する意味を担当するものであり、呼格

の連語的体言に収斂される」とする。

この立場からは、「ノーヤ」喚体句の連体修飾部の形容詞語幹はまさに体言として「体言ノ体言」という連語的体言だと解釈することになる。観点を変えれば、「をかしの御髪や」は、遭遇事態の中核モノを臨時に「をかしの御髪」と名付け、その名を呼ぶ、一語文的な呼格表現だということになる。

しかしながら、述べてきたように、情意評価の形容詞語幹は通常の連体修飾句とはならない。連語的体言という枠には収まらないのである。情意評価の形容詞語幹は、感動表現の一語文としてしか用いられない。そして、この感動表現は、石神（二〇一〇）の立場からすれば、これもまた体言一語文の呼格に立つ用法なのであるから、極端な表現をすれば「ノーヤ」型喚体句は「呼格＋の＋呼格＋や」とでもいうべき形態なのであり、それ故、現場依存の表現としてしか用いられなかったのである。「ノーヤ」喚体句を連語的体言と見ることは無理があるのではないか。

あるいは、連語的ではありながらも、「呼格＋の＋呼格＋や」という形式を露わにしているということは、連語的な体言であることも、主述的な二項であることも、同時に拒否しているのではないか。

五・五 「ノーヤ」型喚体句の積極性

事態がある情意をもって把握されることと、その事態の中核モノへ意識が集中することは、その二つが主述の関係として把握されることにただちにつながるわけではない。情意の自覚と対象事態の中核への意識の集中とは、話者が感動を感じた事態との遭遇体験の二面を別々に捉えたものであることも可能である。先ほどの「いたしや、この御手よ」などはまさにそのような表現としてある。

もちろん、この二面が理性的な判断の回路を通れば、モノとその属性を語るという形容詞文としての主述関係に

整理されることになる。その整理されたものとの類比という観点から見れば、感動喚体句の連体修飾句と骨子体言は、まさしく主述二項ということになるだろう。

しかしながら、この古代語の事実としての感動喚体句は、体験の言語化を果たしながらも、主述二項に整えられないことこそが、その形式の独自性なのではないだろうか。

川端（一九六三）は、感動喚体句の於ける主述の倒逆の意味を「述体の判断における二項関係の未分析、あるいはその主述的な実現の拒否」とするが、古代語の感動喚体句とは、まさにそこに存在意義のあるものなのである。カナ喚体句の「連体形＋骨子体言」という形態のみ見る限り、その二項は述体的な判断を下敷きとして、述体的な判断に届かぬもの、「二項関係の未分析」という消極的なものとしてあるように見える。しかしながら、「ノーヤ」型喚体句は、その「主述的な実現の拒否」を呼格的な形態を一文内で並列するという形式で積極的に示しているのである。おそらくは、感動すべき事態に遭遇した際の内面の情動の感知と遭遇事態の中核のモノへの意識集中、この両者を主体と属性という理性的な判断ではなく、感動の二面として、かつ、一つの体験として表現するところに感動喚体句の真骨頂があったのであろう。

六 まとめ

古代語には、主語述語の対立統一を巡る通常の述定文とは異質の形式が豊富である。感動喚体句もその一つである。しかしながら、感動喚体句が「連体修飾部＋骨子体言」という形式を取ることをめぐっては、それが述体句との連続性という観点で捉えられることが多い。本稿で取り上げた「ノーヤ」型喚体句は、主語述語相当に二語を文中に持ちながら、形式としては述体への連続性を積極的に拒否する特異な形式である。そしてこの形式は、事態との遭遇によって生じた感動を二面で語りながら、一つの体験として語ろうとする表現であったと考えられるのであ

る。

注

注一 一方「終止形＋や」は、主語をもつものも多い。

・なにとなく翁びたるこちして、世間のこともおぼつかなしや（常夏）

・「高麗の乱声遅しや」などはやりに言ふもあり。（竹河）

シク活用では語幹か終止形か区別は付かないが、ク活用と同様に考えてよからう。

注二 上代には形容動詞という品詞そのものが未完成であるので、上代に関しては、形容詞のみを扱う。

注三 蜂矢（一九九八）による。

注四 「語幹＋終助詞や」はわずかに用例が見られる。

・雲はれぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそ止まめ（古今一〇五〇）

注五 新古今和歌集まで下ると数例見られるようになる。

・柴のとにゝほはん花はさもあらはあれなかくめてけりなうらめしの身や（雑歌上一四七〇）

・舟のうち浪のうへにそ老にけるあまのしわさもいとまなのよや（雑歌下一七〇四）

しかし、逆に中世の散文作品にはあまり見られなくなっている。この時代には、和歌に用いるべき雅語だと理解されていたことを示している。

注六 『源氏物語』の助詞ヨの感動喚体句については、

・「人のおもひよらぬことよ」と、憎むにくむ（末摘花）

・さかさまに行かぬ年月よ。老いは、えのがれぬわざなり（若菜下）

など感動喚体句と呼ぶべき用例は存在する。しかし、情意評価の形容詞形容動詞を連体修飾部にもつ感動喚体句は、皆無である。

参考文献

- 浅見徹（一九五六）「の」の歴史『国語国文』二五卷八号
- 浅見徹（一九五九）「絶えむの心わが思はなくに―陳述をめぐる問題」『万葉』三三三号
- 石神照雄（二〇〇〇）「感動喚体に於ける呼格と連体格」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編三四』信州大学
- 石神照雄（二〇一〇）「山田文法の文の論理と述体、喚体」斎藤倫明・大木一夫編『山田文法の現代的意義』ひつじ書房
- 尾上圭介（一九八六）「感嘆文と希求・命令文―喚体・述体概念の有効性―」松村明教授記念会編『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院
- 尾上圭介（二〇一一）「文法に見られる日本語らしさ―〈場〉におけることの生起」と〈自己のゼロ化〉―『国語と国文学』第八九卷第十一号
- 川端善明（一九六三）「喚体と述体―係助詞と助動詞とその層」『女子大国文』一五号
- 川端善明（一九六五）「喚体と述体の交渉―希望表現における述語の層について」『国語学』六三三号
- 工藤力男（一九九五）「上代形容詞語幹の用法について」（初出『国語国文』第四二卷七号一九七三年七月）『工藤力男論考選』汲古書院 一九九九年八月
- 近藤要司（一九九五）「源氏物語の助詞ヤについて」宮地裕・敦子先生古稀記念論文集刊行会『宮地裕・敦子先

生古稀記念論文集 日本語の研究』明治書院

近藤要司（一九九六）「源氏物語の助詞ヨについて」『金蘭短期大学 研究誌』27号

近藤要司（一九九七）『源氏物語』の助詞カナについて』『金蘭短期大学 研究誌』二一八号

野村剛史（一九九三）「上代語のノとガについて 上下」『国語国文』六二卷二、三号

橋本四郎（一九五九）「ク活用形容詞とシク活用形容詞」（初出 『女子大國文』5号 一九五九年三月 『橋本

四郎論文集 国語学編』角川書店 一九八六年一二月所収）

蜂矢真人（一九九八）「形容詞語幹の用法」『井手至先生古稀記念論文集国語国文学藻』和泉書院